

INTERVIEW：インタビュー

NHK 東京児童合唱団 常任指揮者

金田典子 さん

今回、NHK 東京児童合唱団の常任指揮者をされている金田典子さんにインタビューをさせていただきました。金田さんは、合唱についてのお話をとても楽しそうにされ、本当に合唱が好きで指導されているのだなと感じました。東京には山のように合唱団があり、インターネットで検索できるとのことでしたので、このインタビューをお読みいただいた後、一度合唱を聞きに行ってみてはいかがでしょうか。

(聞き手・構成：町田弘香，難波知子)



—— NHK 東京児童合唱団の常任指揮者をされているということですが、合唱団はどのような活動をしているのでしょうか。

合唱団は小学2年生から大学生までという幅広い年齢層の約200人の団体です。小学2年生から4年生までがジュニアクラス、小学5年生から中学2年生までがシニアクラスです。一旦卒団をした後に、もっと合唱をやりたいとか、深めたいという人は、またオーディションを受けて、ユースシンガーズという女の子のグループか、ユースメンズクワイアという男の子のグループ、それぞれ中学3年生以上、大学生までですが、そういうグループに入ります。

主催の演奏会は毎年1回の定期演奏会で、秋に行います。それは全員参加です。それから、年度の終わりくらい、といっても4月になっちゃうんですが(笑)、ユースシンガーズとユースメンズクワイアの演奏会があります。そのほか、NHK 学校音楽コンクールという全国の小中高校生がNHK ホールでの全国大会を目指して、進んでいくコンクールがありますが、その課題曲の初演をさせていただいております。

—— 大人の合唱の指導もされていらっしゃるようですが、大人の指導と、子どもの指導とは違いますか。

基本的にはあまり変わらないんです。

—— そうですね。

言う内容は変わることも勿論ありますし、要求することが少し変わることもあります。合唱団の皆さんの困ること、やりたいこと、楽しいこと、要望することというのは、小さい子から大人まで、小学校の1年生から80代の方まで、同じだと思います。いっぱい歌って歌えるようになって、上手になって、思い切り歌えるようになりたいという思いは、小さい子も結構高いレベルで思っていて。80代の方も、勿論体調も考えながらですけども、上達したいと。思い切り歌いたい、歌えるようになりたいと。知らない曲でもすごくトライされていて、同じだなと思いました。

ですから、子どもだからといって、何かを省くとかいうことはなくて、大人に対してと同じことを言うと、それをメモしたり、それは何ですかと言ってみたり。大人も、音楽が専門じゃない方々がたくさん合唱をされていますが、そういう方々にも要求していくと、調べてきたり、これはどうですかと質問をしてくださったり。年齢の差はないんだなというのを、この頃切に思います。

——人を伸ばす秘訣みたいなものはありますか。

お互い、根気だと思いますね（笑）。あきらめない。

——あきらめない。

はい。あきらめないで、とにかく何回もやる。もう1回、もう1回、もう1回と何回もやりますね。何でできないのと言っても、できないものはできないので、どうしたらこれができるようになるかなと思いつながら、話をしたり、練習したりするように心掛けていますね。何て言ったら通じるかなとか、言い方を何通りも変えて、こっちからもあっちからも言ってみたり、やり方も、あっちこっち変えてみたり。

——やりがいを感じたり、喜びを感じるのはどういう時ですか。

歌っている方が、みんなで歌っていて楽しいと思う瞬間が、嬉しいですね。舞台上それが実現すると、お客さんも喜んでくださることにつながっていくと思います。

——歌の魅力って何ですか。楽器と比べて。

まず、荷物にならない（笑）。それがいいですね。どこでもみんなできとできる。

——そうですね、はい。

それと、喜怒哀楽が音に出る。声に。楽しいときは、そのままストレートに出ますし、怒っていても、声に出ます。面白いですよ。叱った後に歌わせると、怒った声で返ってくるんですね。悲しい時、本当に悲しい時は、もう声が出ないですもんね。何とも自由自在にできるようでできない難しい楽器だなと思いますね。

——小さい頃から音楽をされていたのですか。

遅いと言われましたが、4年生からピアノを始めて、地元の児童合唱団にも入りました。そこで、たくさん歌を歌ったり、ミュージカルもしました。中学では吹奏楽をやっているし、フルートとピッコロを吹いていて、高校からは声楽を始めました。

——指揮者になったのはどのような経緯からですか。

いつの間にかやっていたような気もするんですけども、思い返せば高校の教員をしていた時、音楽専門のクラスを受け持っていたんです。音楽科のあるところだったんです。そこでオーケストラと合唱に分かれた授業があって、合唱を担当していて、その合唱のメンバーの子たちが本当に楽しく歌う人たちで、コンクールにも出るようになったんですね。最初出たときにすぐ賞が取れてしまって、次の年に関東大会に行けたのですが、その後どうも伸び悩んで、自分でも何がいけないのか、壁にぶつかったことがあったんです。それで、合唱のいろいろな講座とかセミナーに行ってみました。そこで、合唱の奥の深さと幅の広さを再認識して、びっくりして、そのまま合唱にのめり込んでしまいました。その時から指揮の勉強を少しずつ始めたんですけど、考えてみれば、高校時代にもクラスで合唱をすると、指揮をしていましたね。自己流で好きに振っていただけですけどね、その時は。

——指揮は、ほかの楽器をやっていた方が、興味を持って始めるということが多いんですか。

まずピアノや楽器・作曲を勉強されてからという方が多いと思います。それから大学で指揮を専攻される方と、楽器などの専攻を持たれてから指揮へ移行される方に分かれます。

——オーケストラの指揮と合唱の指揮で違いはありますか。普段オケで振っている指揮者に合唱団の指揮をしてくださいと言って、それはできるものですか。

できます。基本的にはオケの指揮が基本ですから、オケの指揮者は合唱も指揮できます。

——この曲をこの合唱団で仕上げましょうということになったときに、最初にイメージ作りから入るんですか。

ある曲をやろうとしたときに、その曲のイメージはこちらで持っておいて、練習をしていきます。それで、そのイメージに近づけていくようにしていくうえにもその合唱団の持ち味が合わさってきて、豊かになっ

ていくと思います。自分のイメージだけだと、押し付けてしまうだけになってしまうので、皆さんから出てきたものどちょうどいい具合に合わさると仕上がりがとても良くなります。

— 皆さんから出てくるものというのは、その合唱団の構成とか年齢とか雰囲気みたいなものということですか。

そうですね。同じ曲を違う合唱団で演奏すると、違う演奏になるんですね。指揮者が同じでも。オーケストラもそうで、同じ曲で指揮者が同じでも、違うオーケストラだと、出てくる音が違うので、そういう持ち味というのは出てくるかなと思います。

— 合唱って、古典もありますよね。

はい。

— 古典というと、この曲には、こういう時代のこういう背景がある、この作曲家が作った曲だから、こんな風に演奏しなきゃいけないというのがありますよね。指揮者の方というのは、それに合わせて演奏するんですか。それとも、この曲は、決まり通りにしてみよう、この曲は現代風に自分の好きなようにやってみようとか、そういう感じなんですか。

グレゴリオ聖歌から歌が始まって、現代曲までありますけれども、スタイルは古くなればなるほど、きっちりはっきりしていきます。近代、現代ぐらいの作曲家の作品だと、少し遊んでみたりということが出来ます。音を外してみたり（笑）。

— 音を外しちゃうんですか。

シャウトというんですけど。

— 叫ぶ？

そういう感じですね。例えば「へそうだ」と歌うときに、「そうだ」と言ってしまったり。そうすると雰囲気がもっと感じられるんですね。「へそうだ」と音を付けて歌っているのを、「そうだ」と言ってしまおうという。そうすると具体的に直接感じるもの、伝わるものが出てきたりする、そういうことも出来ますね。

— 楽しそうですね。

なので、楽しいです（笑）。

— 発表会が近づいてきた時に、歌い手さんたちにこうしてくださいねという、そういうものはありますか。のど対策というか、体調対策というか。

しゃべらない。

— しゃべらない？ しゃべるといけないんですか。

声帯は、しゃべる時に使う場所と、歌う時に使う場所は違います。しゃべる時は前の方を振動させて、歌う時は後ろの方なんですね。それで、どちらにしても、しゃべり過ぎると、ペンを使ってペンだこができるように、声帯にたこができるんです。

声帯は、デリケートで、これがぴたっとくっついていると、つややかな麗しい声が出るんですけど、たこができると、出っ張っている、たこのところだけがくっついて、あとはくっつかないんですよ。隙間が空いちやう。そうすると、ハスキーとかガラガラの声になっちゃって、声が出ない。

— 去年、NHKのドラマで合唱指導をされたそうですね。

2013年度が、NHKの合唱コンクールの80回記念だったんです。

— 80回？ すごいですね。

そうですね。ラジオのころからやっているらしいです。それで、2013年の小学生の課題曲が嵐というグループが紅白で歌ったことのある「ふるさと」という曲だったんですが、その曲を題材にドラマが作られました。

『はじまりの歌』というドラマです。山口県の萩市にある明倫小学校というすごく古い小学校、全部木で造られて、くぎとかが使われていなくて、吉田松陰、あちらの方は吉田松陰先生と言うんですけど、松陰先生の「先生いわく」を、毎朝、朗唱するそうなんです。今日よりぞ、幼心をうち捨てて、人となりにし道を踏めかし、とか。そういう小学校を舞台に、NHK学校コンクールを目指す現代の先生と子ども



歌っている方が、みんなで歌っていて楽しいと思う瞬間が、嬉しいですね。舞台上でそれが実現すると、お客さんも喜んでくださることにつながっていくと思います。

金田典子

たちを描いたドラマです。

オーディションで受かった子役さんたちが歌を歌うんですね。その合唱に関する指導をしました。それから、榮倉奈々さんと由紀さおりさんに指揮の指導もしました。由紀さんは、主役の松本潤さんの先生だったという配役でした。子役さんは普段から歌を歌っている子どもたちではなかったので、そばで歌ったりしながら随分練習をしました。

——歌えるようになるまで結構時間がかかったんですか。

そうですね。3カ月ぐらいは練習したかもしれないですね。

——ところで、私たちが合唱を始めたいと思ったら具体的にどんな方法がありますか。探せば合唱団とかいろいろあるんですか。

そうですね、合唱団は山ほどありますからね。インターネットで探して、いろいろな合唱団をみてみたり、東京なら合唱祭とか、コンクールに足を運んで実際に聞いてみる。そうすると、面白いことに、練習風景も見えてくるんですよ。

——そうなんですか。

この人たちはいつも緊張感を持って、ぴりぴりし

た感じで練習されているんだろうとか、にぎやかにわいわいしながら、練習されているんだろうというのが、演奏を見ると見えてきます。だから、インターネットで目星をつけたあと、どちらがいいか悩んだりしたら、合唱祭とかコンクールで生を聞かれるといいと思います。

——いくら努力をしても、歌がうまくならない人っていますか。声も出ないし、音痴だけど、歌はすごく好きという人が歌えるようになりますか。

そうですね。何回練習しても、違う音で歌われる方ももちろんいます。近くに寄って行って、一緒に歌うとなおるんですけど、ほかのパートが歌い出すと、また違うところにいっちゃうんですね（笑）。でも、なおると思います。

——なおりますか。

うん。音痴っていないと言われますよ。

プロフィール かねだ・のりこ

NHK 東京児童合唱団常任指揮者。日本大学芸術学部音楽学科声楽科卒業。同大学芸術研究所研究科修了。声楽を渡辺馨氏、合唱指揮法を大谷研二氏、サボーデーネシュ氏の各氏に師事。声楽家としてミサ曲のソリストなどを務めるだけでなく、指揮者としてもNHKにおける番組や全国合唱コンクールなどの演奏で広く活躍し、特に児童合唱へ熱い情熱を傾けている。